

常盤台の日々

小松幸夫

日本海を望む新潟大学のキャンパスから、常盤台へ移ってきたのは 1990 年の春でした。横浜国立大学には、それ以来 8 年の間お世話になったことになります。その 2 年ほど前に、東大時代にお世話になっていた K 先生から「横浜へ行かないか」というお話があり、当時主任をされていた石井先生が新潟大学へ来られて話がまとまりました。それから専任として赴任するまでの間、1 年間は新潟大学のほうの事情で併任という形になり、毎週木曜日に新潟から横浜へ通って、2 年生の設計製図の時間を受け持っていました。もっとも建築学会の会議や何かがありましたので、東京での用事をついでに片づけることができかえって都合のよい面もありました。

新潟大学は建築学科が新設されたときに赴任し、ほとんど何もない状態から始めたので、大学での生活は苦しくもあり、また面白くもありました。その頃の思い出は今でも強く残っていますが、ここでは直接関係はないのであえて触れないことにしておきます。そんな新潟から伝統のある横浜国立大学へきたときは、正直に言って「ほっとした」気分でした。また設計製図の授業をはじめとして、非常勤の先生方が充実している点は驚きでした。なかでも事務室の前の名札の中に「芦原太郎」の名前を見つけたときは、驚くと同時に少し安心もしました。ほとんど知り合いのいない環境の中で、大学院時代に同じ研究室で何年かをすごした仲間の名前は、その後ほとんど没交渉に近かったとはいえ、とても心強いものでした。

大学生活では、特に 2 年生の設計製図で非常勤の先生方に大変お世話になり、学生諸君とともにこちらも随分勉強させていただいたと思っています。着任当初、大矢省一先生、小林洋子先生には芦原君とともに 2 年生の製図を見ていただきました。どちらかというコンセプト重視の小林・芦原先生と、実務重視型の矢先生のコメントは、どちらもなるほどと思わせるものがあって大変参考になりました。私は建築構法というモノに近いことを考えているので、どちらかという矢先生のお話のほうの方がわかりやすいのですが、「建築はコンセプトが大事だから、自由な発想が許される学生時代には、細かいことはさておき、のびのびと考えるべきだ」という若い先生方の考えにも納得させられるものがありました。

その後、設計製図の授業は第 9 講座の佐土原先生に中心になっていただき、私はその補佐役にまわるような形にさせていただきましたが、非常勤の先生方のお話が面白くて、時間の許す限りは製図室にいるようにしました。こう書く仕事にかこつけてこちらが楽しんでいたようにみえますが、事実そのとおりでした。最初にお付き合いした先生方は順次交代されて、最後は坂茂、増田実、工藤和美の 3 先生になりましたが、各先生方の考え方の違いや共通の面を発見しては密かに楽しんでおりました。殊に坂先生が最初に来られた時の精力的な授業の進め方には感銘を受けました。「建築家とはかくもタフでなければならないのか」と思い、「とても自分にはできそうもないから、設計者にならずによかった」と改めて思わされた次第です。

設計製図のついでに書きますと、卒業設計の発表会も印象に残っています。普段はあまりお目に

かからない、他学年を担当されている先生方の講評をうかがうのは、発表している諸君にはいささか申し訳なかったですが、こちらの大きい楽しみでした。同じ作品でも人によって受け止め方が違うのは当然ですが、作品に対するコメントに各人の個性が表れていて、「なるほどこういう見方もあるのか」と思わせられることもしばしばでした。

ところで私の研究室は、教授の石井先生とともに「材料・構法」の講座ということでしたが、着任前に石井先生から材料の講義を受け持ってほしいといわれ、あわてて昔のノートやら材料関係の本を読んで準備をしました。実は新潟に赴任した直後に、予定されている講座の教官がまだそろっていないということで、仕方なく建築材料の講義をしたことがあるのですが、横浜へ来てまた材料の講義をする羽目になるとは思ってもいませんでした。ついでに材料実験も担当せよとのお話だったのですが、コンクリートは学生時代も含めて実際に練ったこともなく、正直なところどうしていいか分かりませんでした。最初だけ石井先生に付き合っただけ、その後は見よう見まねでやっていましたが、いまだにきちんとやれたとは思っていません。当時の学生さんたちにはここで謝っておきたいと思います。

ご承知の通り、石井先生は膜構造解析がご専門で、研究テーマも構造解析関連のものがほとんどですが、こちらはそうした世界とは無縁なまま過ごしてきた関係で、当初は石井研究室の卒業論文や修士論文の内容はほとんど理解できませんでした。それでも何年か経過するうちに雰囲気だけは分かるようになりましたが、膜構造に関しては結局は門前の小僧の域をでることはできませんでした。私の専門は、学会では建築経済・建築計画の分野に属するもので、どちらかというところ構造系よりも計画系に近いものです。ただ調査データの統計処理などをする関係上、コンピュータを使うということだけが石井先生との共通点といえるようなものでした。したがっておなじ講座に全く異なる研究室が2つあるような状態でしたが、こちらの自由なことを許していただいた石井先生には大変感謝いたしております。

学内の仕事としては、専任として着任早々にまず図書委員を仰せつかりました。たいした仕事ではないというお話だったのですが、会議に出てみると「建築は工学部の代表として全学の会議に出る順番にあっている」といわれ、右も左も分からないままいきなり中央図書館の会議に引っ張り出されました。最初は勝手が分からず困りましたが、他学部の先生方のお話が伺えたのは大きな収穫でした。横浜国立大学は、東京大学や新潟大学などに比べると規模は小さいですが、かえってその方が親密感が生まれるような気がしました。

そうしたことがあったとはいえ、図書委員はまだ負担が軽かったと思います。その後は担当業務がルーチンになっているということで、厚生委員、教務委員を拝命しましたが、このあたりになると会議も作業も多くなって、大変な思いをすることになりました。とくに教務委員は、工学部の入試委員会と教務委員会の両方に出席しなくてはならず、また他の大学では事務方で処理するように思われる成績判定や受験関係の仕事が、ここでは部分的に教務委員の担当になっているので余計に大変でした。こうした事務の進め方は、同じ国立大学でも随分違うものだった次第です。建築は学内委員の任期が2年という慣例ですので、都合6年間のお勤めを果たしたことになりますが、教務委員のあとは2年間の休暇を頂けることになっていましたので、最後の2

年間はゆっくりさせていただきました。

ところで 4 月に赴任した早稲田の理工学部は、J R の駅でいうと新大久保と高田馬場の間にあります。狭い敷地に建物がぎっしりと詰まっているという感じで、また私の研究室が明治通りに接していることもあって、時には息苦しささえ感じます。そんな時、常盤台の緑豊かなキャンパスはとても恵まれていたなと思います。交通の不便さは新潟大も含めて、統合移転した国立大学共通のことで仕方がないですが、国大の敷地の環境のよさはそれを十分に補って余りありますし、そのつもりになれば横浜の中心街へもすぐに行けるというのは大変便利でした。実は横浜への赴任が決まったときには、中華街の店を片っ端から探索してみようと考えていたのですが、実際にはなかなか機会がなくて、結局は探索できた店が数軒ほどにとどまってしまったのはとても残念です。早稲田の近くにもいろいろな店がありますが、やはりミナト横浜のほうが断然魅力的で、なんとかまた中華街探索の機会を作りたいと思っています。

最後に私の最近の仕事についてご報告しておきたいと思います。建築学会では、1995 年から活動していた「ライフサイクルマネジメント基本問題特別研究委員会」が、3 年間の研究期間を昨年（1997 年）で終了しました。本来は昨年度末に完成するはずだった報告書も、今年の 9 月現在でやっと印刷できる状況になり、私の幹事としての役目もなんとか無事に終えることができました。今年（98 年）の九州で開催された学会大会では、特別研究委員会の主催で「時間・環境・建築」というタイトルの研究協議会が開催され、私は副司会という形で出席しましたが、一連の研究の締めくくりとしてはなかなか良かったと自画自賛しております。このライフサイクルマネジメント（LCM）という言葉はまだなじみがないと思いますが、簡単に言うと設計・施工だけでなく、建築を解体・廃棄に至るまでの一生のサイクルで考えようというものです。国大時代にも横浜市の建築保全公社からの依頼で、横浜市の所有する建物群の計画保全について考えたことがありました。このときは多数の国大建築OB諸氏のご協力を得て、建物の点検結果に基づいて補修・改修の優先順位をつけながら、計画的に保全を行うべきであるといった内容の報告書を作成することができましたが、それを具体的に運用するとなると、まだまだ克服すべき問題も多いようです。いずれにせよ建物をライフサイクルで考えるということは、これからますます重要になってくると実感しております。

もう一つの仕事としては建築用語辞書の翻訳があります。これはアメリカで出版された建築用語を図解とともに解説したユニークな辞書を、何人かで分担して日本語に訳したのですが、翻訳の作業中には彼我の建築文化の違いを痛感しました。ことに日本にはない用語が多数登場するので、それをどうするかにまず苦労しました。単に音をカタカナに直すだけでは芸がないし、かといっていい加減な日本語を作るわけにも行かず、いろいろな本を調べつつ言葉をひねり出していました。結局足掛け 3 年を要してやっと彰国社から出版されましたが、そうなる今度は売れ行きが心配ですし、また内容的に間違いがあったのではないかとヒヤヒヤしています。あとは研究論文としてまとめるべきことをいくつか抱えているのですが、年とともにだんだん怠け者になってきたようで、宿題を片づけないまま横浜国立大学を卒業（あるいは退学？）してしまったような気分です。

いろいろとつまらないことを書き並べて来ましたが、横浜国立大学および水煙会の皆様方のますますのご発展をお祈りしつつ、筆を置きたいと思います。